



E c h o No. 1 7 4
 令和6年 秋彼岸号
 院寺寺寺
 峰福林禅
 一禅禅宗
 * * * *
 羽村臨濟会

その執着が不幸を招く

地球がおかしい。
 世界がおかしい。
 日本がおかしい。

昔に比べ近年の夏の異常な暑さ、降る雨の激しさ、これだけ取り上げてみても、地球がおかしくなってしまったのではないかと、感じている人は多いと思います。この異常さを以前は地球温暖化と言い、今では気候変動と呼んでいます。本当の異常さは、環境テロリストという過激な運動家を生んだことだと思えますが、

次に世界の現状を見れば、二十一世紀にもなつて、独裁者が率いる全体主義国家が、傍若無人の振舞いをしていることに、憤りを覚えます。広大な国土を持ちながら、なぜ他国を侵略するのか。なぜ残酷な核兵器を開発するのか。征服欲だけの問題なのか。民族か宗教か。長い歴史があるとは言え、理解不能です。地球も世界もおかしなことだらけの現代ですが、実は最もおかしなのは、この日本です。お気付きの方もいるでしょうが、ここでは私見を少々。まず、この国の経済を三十年以上に

亘つて停滞させ、国民を苦しませても何の責任も感ぜず、恥とも思わない政治家や役人がいることです。税金で勉強して、税金で食べていくくせに、納税者の幸福なぞ一顧だにしない輩。まさに無慈悲の極みか、無能の極みです。

低劣な政治家は肝心なことはせずに、余計なことばかりします。肝心なこととは、北朝鮮に拉致された全ての人を取り戻すこと、皇位継承を男系で守れるよう立法すること、そして憲法を作り直すことです。日本の独立自尊のためです。

余計なこととは、LGBT法や夫婦別姓や同性婚のような、日本の伝統を破壊する法律を作ることです。

他にもおかしな判決を下す最高裁の判事、国力の衰退を助長する原子力規制委員、金の亡者の経団連、平気で嘘をつくメディア、日本嫌いの学者や教師。エリート達が自分の学歴や知識に執着することが、今日の日本の不幸の元凶です。

(禅福 泰文)

足ることを知る

お釈迦様が入滅される際に、最後に説き残した「遺教経」があります。その遺教経の中に「八大人覚」という教えがあります。「大人」とは「修行者」のことです。この「八大人覚」とは、

- 「少欲」……欲を少なくする
- 「寂静」……騒がしいところは避ける
- 「精進」……進んで努力する
- 「不忘念」……法を守り忘れない
- 「禅定」……心を乱さない
- 「修智慧」……知恵を修める
- 「不戲論」……無益な争論をしない
- 「知足」……足ることを知る

という、修行者が実践すべき八つの項目のことです。

今回は、「八大人覚」の一つである「知足」についてお話しようと思います。皆さまの中で、「少欲知足」という言葉で「知足」をご存じの方もいらっしゃると思います。これは、「少ない欲で満足し、今この現状に感謝する」という意味の言葉です。

また、「遺教経」には「知足」について、「足ることを知る者は、貧困であっても、心が広くゆったりとして安らかであるが、足ることを知らない者は富裕であっても、心が貪欲に満ちて常に不安定な状態にある。知足の者と不知足の者を比べ、実に知足の者は富樂安穩である」という意味の言葉が述べられています。足りていることを知らないと、次から次へと欲望が溢れ、常に満ち足りていない状態になってしまいます。するとどうなるか。自分勝手にあれこれ欲するようになり、その結果、得ることの出来ない苦しみや、様々な争い事が起こることになります。まさに不安定な状態というこ

とですね。また、「足ることを知る」には、己の分限を知っていることが何よりも大切です。上述したことから、「知足」とは「今この現状に満足し、感謝する」ということになるのです。また、満足するということは、「幸せ」であるとも言えます。つまり、「知足」は「幸せ」であることに気づかせてくれるのです。「八大人覚」の中に「少欲」があるように、お釈迦様は全ての欲を無くせとはおっしゃっていません。行き過ぎた欲は身を滅ぼすこと、身近に幸せがあるということを気づかせて下さっているのです。過去を振り返り、あのととき幸せだったと過去に「幸せ」を感じた経験が多々あるかと存じます。限りある命の中で「足ることを知り」、今この現状が幸せだと気づくことが多い人生でありたいものです。

(禅福 尚玄)

禪と共に歩んだ先人

山岡鉄舟 XVII

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思えます。

鉄舟、大悟す

明治帝の侍従としての仕事のかたわら、三島の龍澤寺、星定和尚の元への参禅にはげむ鉄舟でしたが、なかなか成果を出せずにいました。十七、八歳の若い頃から二十余年余り禪の探求にいそしんできたものの鉄舟本人としては一進一退と感じられ、自らの修行にも疑問を抱く様にもなっていました。

龍澤寺へ参禅を始めて三年、星定和尚

から「よし」と許しを得ました（悟ったと認められる事）。しかし鉄舟本人は全く納得できませんでした。内心「なんだ、つまらぬ。こんなことでよいなら、三年通つて馬鹿を見た」と辞去して箱根に差しかかると、山の端から富士山が現れました。「はっ」そこで豁然として悟つたのでした。

喜んだ鉄舟は、星定和尚の元へ走つて戻りました。和尚はにこにこして「今日はお前が、間違いなく帰つて来るだろうと待っていた」と言いました。

その悟りの心境を鉄舟は

晴れてよし 曇りてもよし 富士の山
もとの姿はかわらざりけり

と詠みました。

大道を会得した鉄舟は、このあと、天龍寺の滴水和尚、相国寺の独園和尚、円覚寺の洪川和尚らについて仕上げをめざしたのでした。

西郷との別れ

大悟する一年前、政争に敗れ、下野し

ていた西郷隆盛を鹿児島まで迎えに行くと明治帝よりおおせつかります。帝は西郷を大層気に入っており、下野してしまつた事をおしんでおられました。西郷と仲の良い鉄舟を遣つて呼び戻そうとしたのでした。鉄舟は無理だと断りましたが、たつての仰せで一人鹿児島へ向かいました。温泉へ来ていた西郷を訪ねて行くと鉄舟を見た西郷は「迎えに来たのか」と聞き「むむ、そうだ」と鉄舟は応えませんでした。あとは西郷も聞かず、鉄舟も話さず、ただ四方山話で飲みあかしたのでした。別れ際、鉄舟は西郷に書を数枚所望します。それならと西郷も鉄舟に所望し、お互いで五、六枚書き別れました。鉄舟も西郷もこれが今生の別れとなる思いがあつたのだらうと思えます。その三年後、明治十年（一八七七）の西南の役で西郷は帰らぬ人となりました。

禪寺雑記帳

ようやく削ることが出来ました。

◆中身が見えるまで削った4つの種を1つずつ水の入ったガラスのコップに入れて、陽当たりの良い場所に置きました。

5月上旬のことでした。

◆種はすぐに全て芽を出し、小さな丸い葉が3枚出た2週間後にそれぞれ水鉢に植え替えました。同じ条件で、しばらくはどれも同じように成長しました。

◆私の寺で蓮の花が今年も沢山咲きました。蓮は汚い泥から生じるにも関わらず、泥には染まらず綺麗な花を咲かせることから、悩みや苦しみに満ちた現実の迷いの世界でも安楽の清浄な悟りの境地に至ることが出来るという、仏教を象徴する花です。

◆毎年春に蓮レンコンの植え替えをしますので、今年初めて種から育ててみました。蓮の種は外側の皮が非常に硬く、これで中身を守っている為、ただ蒔いても芽が出ることはありません。発芽させる為には外皮（種のおしりの部分）を削る必要があるのです。最初は爪切りのヤスリで削ろうとしましたが、硬すぎて全く刃が立ちません。ああこれだから大賀ハスは二千年の時を経て芽を出すことが出来たのだと実感。電動ヤスリを使ってよ

くこの蓮は冬を越せない筈です。

◆同じ種でも、持って生まれた素質というものがあのだなあと教えられました。

◆実はここ数年、「蓮れん」が男の子の名前の人気ランキング上位の常連となっていて、2018、2019、2021年はそれぞれ1位になっています。

（禅林 恭山）

